

坪田 明子

お弁当が大嫌いで大好きだった。

「おはよー」

「おそよーでしよ！」

「やっぱり？昨日テレビ観てたら寝るの遅くて」

「何のテレビ？」

朝のなんてことないおしゃべりの声が聞こえる。今来たなっちゃんたちはテレビの話、黒板の周りにいる健二くんは最近ハマっている漫画の話、後ろの窓際の平山さんたちは誰かの噂話。聞くつもりはなくとも自然と聞こえてきてしまう。

「でね、相手の目を見るだけで引いたカードがわかつちやうんだって！」

「えーうそっぽい。何でわかるの？」

「えーと：何だっけ？何かちよー簡単だったよ」

『カードの絵柄が一枚だけ逆だから』
と、心の中で答えてみる。口には出さない。

「ちよっと！そこ肝心じゃん！」

きゃっきゃつと笑う女の子たちの楽しげな声が、聞こえないフリをしている私の全身に響いてくる。

『楽しそうだな・・・』

そつと横目でその子たちを見ようとすると教室の入り口からひとときわ大きい声で話し、じやれあうように入ってくる3人組の女の子たちが目に入った。

『あっ・・・』

と思うが早いか、私はすぐにカバンの中を整理したり教科書を出し入れして忙しいフリを始めた。3人は新しく買ったストラップについて話しているようだ。

『おはようって言ってみようかな・・・
でも「何？」って思われたらやだし・・・』

そんなことをもんもんと考えて、それよりも向こうから話しかけてくれないかなと思いつつ、ちらつと彼女たちの方を見ると、もう席に座っておしやべりに夢中になっていた。

私は落胆したのかほっとしたのか、よくわからない気持ちになりながらも

『大丈夫、私が忙しそうにしてたからで無視されたとかじゃない』

と、そこだけ強く意識しておいた。

「大人しくて真面目な子」それが私、辻村由美子の評価だ。この評価は13年間ほとんど変わることもなく私につきまとい続けている。

そんな私が「クラスで一番騒がしい人」ランキングベスト3の真奈、愛美、玲菜のグループと一緒にいるのは自分でも変な感じがする。

もともと転校生で一人きりだった玲菜と同じ班になって話すようになったことが始まりだが、クラスになじむにつれ、玲菜はどんどん

ん元気になっていった。去年の秋には体育祭の実行委員に推薦されるほど目立っていた。そこで一緒に委員になった真奈や愛美とはすぐに仲良くなったみたいで、その頃から3人で一緒にいる姿をよく見かけるようになった。私は「玲菜の友達」ということで3人の中に入っていたが、何だか継ぎ足して増築したへんてこなアパートみたいな違和感があった。その中で私はなるべく邪魔にならないように過ごす。忙しいフリをしてわざと教室に残って玲菜たちに先に帰ってもらったり、先生に呼ばれたと言って意味もなく昼休みに校舎をぐるぐる歩いていたりする。「それが周りのため」なんてかっこつけているわけではなく、単に嫌がられて一人ぼっちにされるのが怖いからだ。今だって一人みたいなものだけど、はつきりそう言われたわけじゃない。クラスではもっともっとはつきりと一人でいる子もいる。それに比べれば、ずっとマシだ。

だから一人だと思われないうちに常に忙し

いフリをする。「私は忙しくて、だから話せないんだよ」という雰囲気を出すように努力する。授業の合間にある10分休みには何回も水飲み場へ行って手を洗ったり水を飲む。あまり不自然にならないように途中トイレにも行く。トイレに行くまでの廊下はいつもよりずっとゆっくり歩き、なるべく誰もいない場所まで行って時間ぎりぎりまで中でじっとしている。さすがにやることがないけど、大勢が賑わう教室で人目にさらされながら一人でいるよりトイレの個室で一人でぼーっとしている方がずっと楽だった。

そんな風にして時間を潰す術を身につけたが、唯一難しい時間がある。お弁当の時間だ。西名中学校では週に一度午前中で授業が終わり、午後は部活だけになる日がある。部活がある人はお弁当を持ってきて、その日だけは好きな場所で食べていいことになっている。玲菜と一緒にソフトテニス部に入った私もお弁当を持ってきている。しかし、今日もお弁

当の時間になった瞬間に逃げるように教室を出てきてしまった。そのまま技術棟の4階へ向かう。

技術棟は音楽室や工作室がある棟で、生徒たちがいるクラス棟とは反対側にあり、授業がなければほとんど誰も来ない。そこが私のお弁当の時間だ。

よく不良が屋上で一人でのんびり空を見上げながらパンを食べてる、なんて何だか孤高のヒーローみたいでかっこいい気がするけど、それは嘘だ。一人でいることそのものがかっこいいんじゃないかって皆がやらないことだから「何となくかっこいい」と思わせているだけだ。だって、私も一人でお弁当を食べているけど、全然かっこよくない。

一人でいることがバレないように隠れて急いで食べるからご飯がのどに詰まって食べにくい。水で流して一気に食べる。お母さんが朝早くから作ってくれているけど、味はほとんどわからない。と、

「もー、早くご飯食べたいのに」

「ごめん、ほんつとごめん！」

誰かの声が聞こえてビクッと肩が跳ねる。忘れ物だろうか、階段の下から早足で登ってくる音がする。慌ててお弁当をしまって、ぶらぶらと何か用事があるフリをして階段を上から降りていく。すれ違う時はちよっとうつむいてお弁当を見えないように抱え込む。すれ違う時、2人がこっちを見た気がして、一気に心臓がドキドキし始める。

『こわいこわいこわい。一人なの？って思われたかもしれない、一人でお弁当食べてるってウワサされるかもしれない』

もう、この世の終わりみたいにドキドキしていたが、

「が！」

「・・・ぎぐげご？」

「違うよ！『蛾』！そこにいるよ。でっかい。絶対ムリ！」

と、私とは関係ない話で盛り上がってるら

しく、そのまま行ってしまった。

ほっと息を付いてさっきの場所に戻ろうと階段を登っていくと一番上から一段下の場所に大きな蛾がいる。羽を広げたら手のひらくらいありそうな巨大な蛾で、一瞬びっくりした。物が言わない蛾はさっきの2人よりよっぽど安心できるように感じる。そっとしゃがみこんで「お前一人ぼっちなの？」と話しかけてみる。蛾はバタバタと羽を動かすだけで何も言わない。

「私も一人なんだ」

きつとこの後の部活でも、一人で壁打ちをして一生懸命に練習しているフリをするのだろう。いつものことだ。『全然気にしてないよ』『壁打ちが好きなの』と心の中で言い訳をしてちっとも楽しくない時間をやり過ごすのだろう。

―涙がでそうだった。

きっかけは突然やってきた。

「これから2つのグループに分かれて意見交換します。演劇がいい人は窓側に、お化け屋敷がいい人は廊下側の席に移動してください」

10月に行なわれる文化祭の出し物を決める話し合いで、私たちのクラスは演劇をやるかお化け屋敷をやるかですっかり揉めていた。

「絶対劇がいい！去年もやったけどすごい盛り上がったし」

と主張するのは演劇派の女子の意見でその中心は真奈や愛美、玲菜で大半の女子と男子も何人かが賛成している。

「お化け屋敷ってやったことないから面白そうじゃん」

と負けずに言い返すお化け屋敷派は男子が多く、賛成する女子の顔ぶれは何となくクラスでも「浮いてる」人たちばかりだ。

その中で私は廊下側の席で背筋を丸めて机の上ばかりをじっと見つめていた。

「お化け屋敷って超陰気じゃない？」
ときおり聞こえるひそひそ話にどうしようもない居心地の悪さを感じてしまう。

最初は演劇に行こうとした。真奈たちがそっちへ行くのが見えたからだ。ただ、私は去年「観客席係り」という劇とは全く関係ない係りで、当日椅子を並べただけだった。ぼんやり今度もそんな感じかなと思っていたところに、青木さんが男子の中一人トコトコとお化け屋敷側の席に移動する姿が見えた。

青木さんは女子の中では身長が高く大柄な体型をしている。ただ、おっとりした性格なのか体育は苦手です。ドッチボールでもすぐに当たってしまう。休み時間に一人でノートに一生懸命アニメのキャラクターを描いている姿を何度か見たことがある。

あまり自分の意見を主張する感じではないが、その青木さんが迷わず一番にお化け屋敷側に動いたのだ。その後からちらほらと他の子ども動き出し始めた。その行動を見た私の心

にお化け屋敷でおどろかせた方が面白そうだなという気持ちがむくむくと湧き上がっていた。そしてその後姿に引っ張られるようにお化け屋敷側に行ったのだ。

最近ではあまり私に関心を向けていなかった玲菜もこの時は「えっ？」という顔をして私の方を睨んでいた。当然演劇に賛成すると思っていたのだろう。多数決で決めるこのクラスの中の同じグループ同士の子たちは団結して票を集める。私はただただ机を見つめ続けていた。

話し合いは中々まとまらなかった。

「演劇はあーだ」

「お化け屋敷はこーだ」

とお互いの意見は一致しないままどっちも譲らない。時々先生が「くさんはどう思いますか？」と意見を言わない子を指名することもあったが、指名された子は何かもごもごと言うだけでその「もごもご」も全く無視され結局クラスの中心人物同士の話し合いが続いた。

時々真奈や愛美から咎めるような視線を感じ丸めた背をさらに小さくして、石のように、そこにいない人のようにじっとしていた。

「じゃあ次は、お化け屋敷の方で・・・」
先生がこっちを見る。

『指すな指すな指すな』

私は必死で祈る。

「青木さんどうかな？」

指名されたのは一番にお化け屋敷側へ行った青木さんだ。

先生に言われて立ち上がった青木さんは他の子と同じようにやっぱり始めはもじもじとして指をいじっていた。

「何かいいなよー」

真奈の大きな声が上がる。私はその声を聞いただけで「びくっ」と体が震え、自分が言われたわけでもないのにオドオドと気持ち落ち着かなくなり、さっきよりもかたいかたい石になって下を向いていた。

すると、青木さんが「あの・・・」と小さ

な声で何か言ったかと思うと、

「演劇もすごく面白そうだと思うけど、役の数は決まっているから去年だと当日やることがない人も出てきちゃって・・・。お化け屋敷だったら全員が主役で、来る人を驚かせられるから楽しいかなって思いました」

一瞬、誰もがポカンとして予想もしなかった青木さんの言葉に呑まれてしまったようだった。

「あ、終わりです」

言い終わってまた指をもじもじさせて席に座った。ただ、いつもは小さく丸めるように座る背中がなんだか今は皆を支える大きな柱のように見える。

全員が楽しめることを考えた青木さんの言葉は演劇側にも変化を起こし「ちよっとそうかも」と心移し始めている子もいるみたいだ。しかし、

「そんなのムリに決まってるじゃない！何十人もお化けいらなくない！」

と、今までの雰囲気ぐいっと引き戻すような力を持った声を上げたのは真奈だ。

真奈の目は激しく青木さんを睨んでいる。そしてその声に反対する女子も、男子も、いない。確かに青木さんの言うような「全員が主役」になれるかわからない。でもだからこそやってみる価値があるんじゃないか？初めから「ムリ」と決め付けるのはおかしい。私だって去年と同じ椅子並べじゃなくて今年はずっと積極的に関わってみたい！

「そんなの・・・」

気がついたら私は立ち上がっていた。思ったよりも大きな声が出てしまったかもしれない。

「なに？」という空気が流れたが、構わず一気に言った。

「そんなのやってみないとわかんない！・・・と思います」

最後は弱々しくて消えそうなくらい小さな声になってしまったが、ともかく言えた。思わぬ2人の「大人しい子」の連続発言に教室

はあっけにとられたようになった。私は震える足をこらえて静かに座った。青木さんの背中が振り向くのが見えた気がした。

「今日も試合しようね！」

「先行ってるから〜」

バンッと背中を強く叩かれて私は前に倒れそうになる。転びそうになるのをぐっとこらえて何でもないようにニコニコしながら振り向いて、

「うん、後でね・・・」

と手を振る。今日で3日目だ。

ソフトテニス部の試合はいつもダブルスで、私と愛美、玲菜と真奈がペアを組んでいる。ただし、狙われるのは私のみ。運動神経のよい真奈は今のソフトテニス部で一番上手い。愛美と玲菜も十分真奈と打ち合える。それに引き換え時間を潰すだけの壁打ちしかしてこなかった私は圧倒的に下手くそだった。打ち返せないのを笑うかのように集中して強打をする。ボールの勢いに負け、ラケットをはじ

きかされると、

「いえ〜い！」

と言つて真奈と玲菜はハイタッチを交わす。

愛美は

「何でとれないのー？」

と怒りながら、でも半分ばかりにしたように笑いながらさっさと自分のポジションに戻っていく。

『もう3日目・・・』

3日前、話し合いの末、文化祭の出し物は多数決で演劇に決まった。演劇派に「反論」した私はその日の部活から強制参加の罰ゲームを受けている。他の部員を見ると、皆気まずそうにチラチラ見ながらも誰も「やめなよ」とは言わない。

「はい、アウト。3―0で真奈たちの勝ち。」真奈が終わりを告げる。

「ちよ〜早く終わったね。」

玲菜が真奈に駆け寄る。私は負けたことに対して愛美に「ごめんね」と言おうとしたが、

愛美もさっさと真奈たちの方へ行ってしまった。寂しくはあったが、終わったと思うとほっとした。

今日はこの後2人組で筋トレとストレッチをして解散のはずだ。「誰か1人の子……」

と周りを見回した時、ハッと気がついた。

『みんな私を避けてる……？』

3人にいる子たちもいるのに私の周りには誰一人いなかった。

『これだと、みんなの前で一人で筋トレもストレッチもやらなきゃいけない……。』
たとえば集中的にボールを狙われてもさっきは「一人」ではなかった。

その時全身から血の気が引き、思わず「今日は早く帰らなくちゃいけない日だった、ごめんなさい！」
と、誰に言うわけでもなく言って、カバンを持って逃げるようにその場から早足で抜け出した。

誰も引き止める人はおらず、代わりに「ほんと、お化け屋敷とか意味わかんないこという人もいるよね」という大きな声が聞こえただけだった。

私は聞こえないフリをしてカバンを持ってトイレに駆け込んだ。ぐちゃぐちゃのかばんの中からきれいに包まれた弁当箱が目に入る。

今日もすぐコートに来るように言われて一口も食べられなかったお弁当。お母さんが心配しないようにちよつとでも食べなければならぬ。誰かが来る前に片付けてしまおうと思いついて、一口食べようとした瞬間、強烈な吐き気に襲われた。便器に顔を突っ込んでみるが、糸を引くような透明な液体しか出てこない。ぐるぐると頭に中に真奈や愛美、玲菜の顔が現れ、最後に一人つきりで弁当を食べる自分の姿が現れた。その時便器の暗い穴を見つめながら、ただただ「友達が欲しい」と、それだけを願った。

その日、まだ吐き気が残る気分のまま家に

帰り、ほとんど手を付けられなかった弁当箱を黙ってお母さんに渡した。お母さんはふたを開けて驚いたように

「どうしたの？」

と聞いてきたが、「別に」とそっけない返事をし、「疲れたから寝るね」と言って、そのまま逃げるように寝てしまった。私は逃げたばかりだ。

翌朝起きてみるとテーブルの上には新しいお弁当と小さなお守りが置いてある。中をあけてみると「由美ちゃんなら大丈夫、やればできる！」とガッツポーズをして変な衣装を着たゾウが叫んでいるイラストが書かれていた。

「変なゾウ・・・」

ゾウはガッツポーズしないし、なぜ犬や猫と違ったかわいい動物ではなくこんな人間みたいな衣装を着たゾウなのだろう？

ただ、そのゾウを見ていると何となく笑いがこみ上げてくる。

「やればできる・・・」

私はお弁当とお守りを持って玄関を飛び出した。

「やればできる、やればできる！」

その言葉をまるで呪文のように繰り返しながら・・・。

「やればできる」そういうのは簡単だが、実際に行動するには大きな勇気が必要だった。

『もう、一人は嫌だ。』そう思って誰かに話しかけようとするが、いざ声をかけようとすると足がすくんでしまう。

『平山さんはあんまり話したことないし、なっちゃんときさっちゃんとは2人で話してるし・・・』

いつもの水飲み場へもいかず休み時間ごとにキョロキョロと周りを見回していた。しかし、誰にも声をかけられないまま掃除の時間になっってしまった。朝から数えて約6時間。今も一人でホウキを掃いている。

『何やってるんだろう・・・』

と諦めかけたとき、さっちゃんが一人で黒板を消しているのが見えた。

『今だ！』と思っただけで何気ない感じで黒板の方へ近付き、

「あ、の、手伝おうか？」

と聞いてみた。ちよつと声が小さかったかもしれないと言えた。しかし、

「え？」

さっちゃんは戸惑ったように、

「別にいいよ」

とあっさり断ってきた。

『拒否られた』と内心ひどく傷つきながらも、

「あ、ごめんね」

となぜか謝ってしまった。そそくさとその場から離れながら、また目の前が真っ暗になる。

昨日の便器の穴と同じ暗さだ。また吐き気がしてきて涙が滲みそうになる。

『やっぱり何もしない方がいいか』

も・・・』

と下を向きかけたとき、あのお守りとへんてこなゾウが頭に浮かんだ。

「やればできる」

確かにたった一回の失敗で諦めてしまっただけで、今までと何も変わらない。ここで一步を踏み出すか出さないかは多数決ではなく私自身が決められる。笑っているフリも平気なフリもしていない自分の心の声を聞いてみるとやっぱり「友達が欲しい」と言っているのだ。

下を向きかけた顔をぐっと上げると、青木さんがホウキを持って何かに困ったようにオロオロしている姿が目に入った。青木さんの足元を見ると、小さな蝶が羽根を傷つけたのか床の上でバタバタともがいていた。

ぐっと息を詰めて青木さんに近付き、足元の蝶をつまみあげた。

「すごい」

と青木さんが目を丸くして私と蝶を見ている。

「あの」

我ながら情けない声が出た。

「蝶苦手なの？私、虫とかわりと平気なんだ。この蝶逃がしてくるね」

そう言っつて、私は教室の窓からそつと外へ出してやった。蝶はヨタヨタしながらも何とか空へ舞い上がっていく。

すると後ろから「ありがとう」という声が聞こえ、振り向くと青木さんは笑っていた。

「私、虫駄目なんだ。ありがとう。じゃあ、私ゴミ出してくるね。」

青木さんはホウキを片付けて教室を出て行った。なんてことのない会話。でも、じんわりと胸が暖かくなってくる。

「ありがとう」たったそれだけなのに、何だか自分がここにいていいんだと言われた気がした。このままで終わりたくない。いつも一方的にボールを受けてるだけじゃ、だめだ。

私はホウキを置いて駆け出した。廊下は掃除中の生徒でごちゃごちゃしていて青木さんの姿は見えなかった。途中何度もぶつかりそ

うになり、よろけながら階段を一段とぼしで
駆け下りると、昇降口にいた。大きなゴミ袋
を2つ抱えていつものようにトコトコと歩い
ている。その背中に向かって、

「青木さんっ！」

と叫んだ。突然の大声に驚きながら青木さん
が振り向く。この前の話し合いのときにも大
きな声で意見した後、青木さんが振り向くの
が見えた気がしたが、あときは下を向いて
てよくわからなかった。今は、真っ直ぐ青木
さんの顔が見える。

「あの、ありがとう」

「？」

「いや、この前の文化祭の話し合いのとき
青木さん堂々と意見言ってますごいなと思っ
たんだ。でも、私の意見で何か変な感じにな
っちゃって……。なのに今日も普通に話し
てくれて……」

自分でも何が言いたいのかわからなく
なってくる。でも、青木さんはニコツとわら

った。

「ああ、あれは辻村さんが意見言ってくれなかったら私も何も言えなかったよ。演劇になっちゃったけどすごい嬉しかったよ。」

じわっと目の前が滲んでくるのをぐっと我慢して最後の勇気を振り絞る。

「青木さん、美術部だよね？ 今度のお弁当の時間、一緒に食べない？」

きつと声も顔も震えてた。何でもないフリなんて出来なかった。体の全部を使って青木さんの答えを待った。

「今度のお弁当の時間？」

だめだ。また下を向いてしまう。その間はほんの一秒か二秒程だったかもしれないが、私には永遠に感じられた。

「いいよ！食べよう。」

青木さんの声に私はゆっくり顔を上げた。すると水の中にいるように青木さんの顔がぐにやりとにじんで見えた。今度こそ我慢できずに嬉しくって涙を流したのだ。

―2年後―

高校生になった私は美術部に入った。今、目の前にあるもの、それを写しとることでそこに人や物があつたということ永遠に伝えることが出来る。そのことに魅力を感じ、自分で選び自分から入部した。

「由美、今日スケッチ行かない？」

「あー、ごめん先約ありだわ」

同じ美術部の子に「ごめん」と両手で拝む真似をして教室を出る。

月に一度、第4土曜日、私たちは再会する。近所の広場へ走っていくと見慣れた背中がある。女子にしては大柄で高い身長。その背中を小さく丸めるように座っているが、時に堂々と頼もしくなる背中。

「優子！」

背中に向かって呼びかけると青木優子はお弁当を持った右手を振り上げて、

「おそいぞー！」

と笑いかける。

「お待たせ〜！」

と言いながら私もお弁当を振り上げる。

「さてと」

「青空弁当」

「今日も食うぞ〜！！」

「おお〜！！」

青木優子は学区外の専門学校へ進学した。優子と過ごした卒業までの1年半を考えると寂しくないわけがなかった。優子と離れて別の学校へ行くことの不安もあった。でも、私は知っている。「やればできる」ことを。勉強・友達・部活・恋・これから起きる全てのこと。辛いこと、悲しいこともあるかもしれない。でも自分の一歩ですべて変えられる。辛いことだってわくわくすること、悲しいことだって嬉しいことに変身してしまうんだ。

中2のあの日から私はいつもお弁当をからっぽにして帰る。そして、今日も、

「ごちそうさまでした！」